



お茶とフレイル研究分科会

リーダー機関

共栄製茶株式会社

代表者名

代表取締役 森下康弘

リーダー名

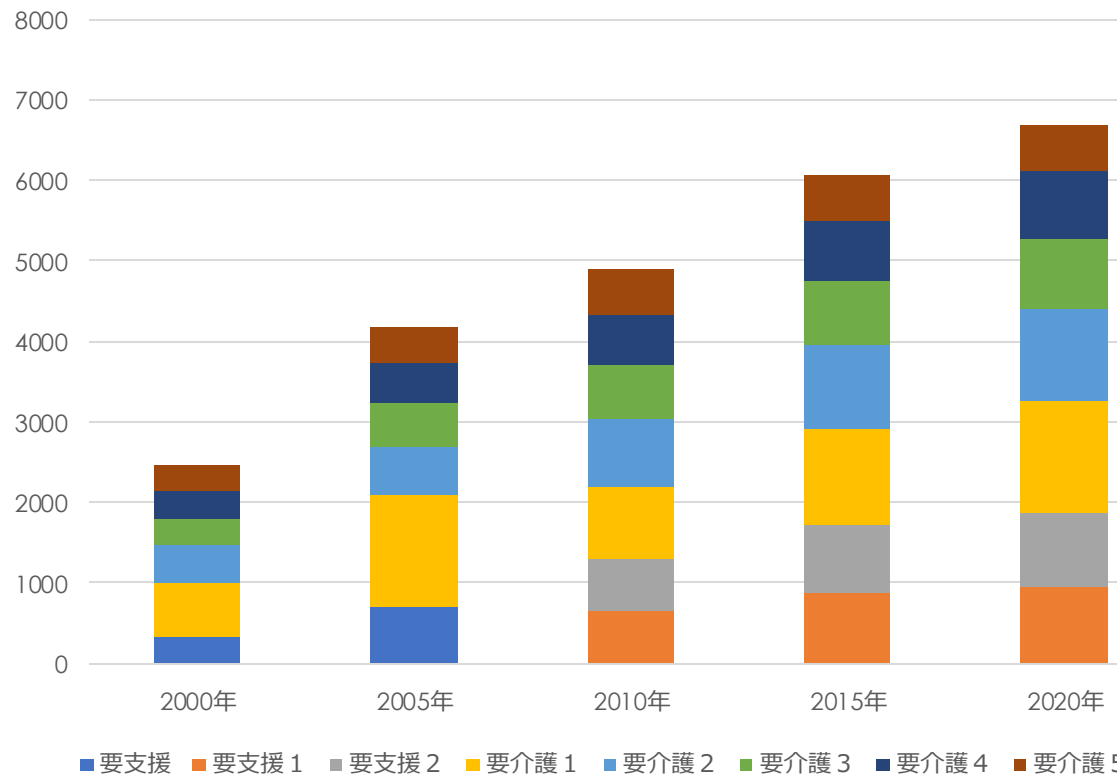
京都テクノセンター長兼経営戦略部門副本部長 立開康司

人生100年時代の課題 ～フレイルとどう向き合うか～

- フレイル（加齢により心身が衰えた状態）の放置は、要介護状態に移行する危険性が高い。
- 一方、フレイルの兆候を早期に把握し、適度な運動と食事で健康な状態を取り戻し、あるいは健康を維持し、人生を健康に楽しく生きることが出来ます。

- 我が国は、高齢者が国民の約3割を占める超高齢化社会になっており、健康寿命は、2020年時点で、平均寿命より9年から12年短くなっています。
- フレイルを放置すると、日常生活に支障をきたし、要介護の危険性が高まります。介護保険制度における要介護又は要支援の認定を受けた人は、2020年度で669万人となっており、2000年度の247万人から、2.7倍に増えています。
- こうした中、日常的に茶を摂取する生活習慣のある人は、フレイル該当者が有意に少ないという研究結果があり、茶が有する様々な疾患に対する保護作用、社会参加促進作用が注目されています。

(単位：万人)



(出典：内閣府「令和5年版高齢社会白書」から抜粋加工)

分科会活動のテーマ、取組概要、取組方針

活動テーマ

お茶によるヘルスケア & フードテックのイノベーション創出

背景 取組概要

お茶については、それに含まれるカテキン類が重合することで、重合ポリフェノールの一種であるテアフラビン類、テアルビジン類などに変化することが判っており、これらが持つ機能として、抗酸化作用、抗がん作用、抗菌作用、抗ウイルス作用といった様々な保健作用を有することが、最近の幅広い角度からの研究で明らかになっている。

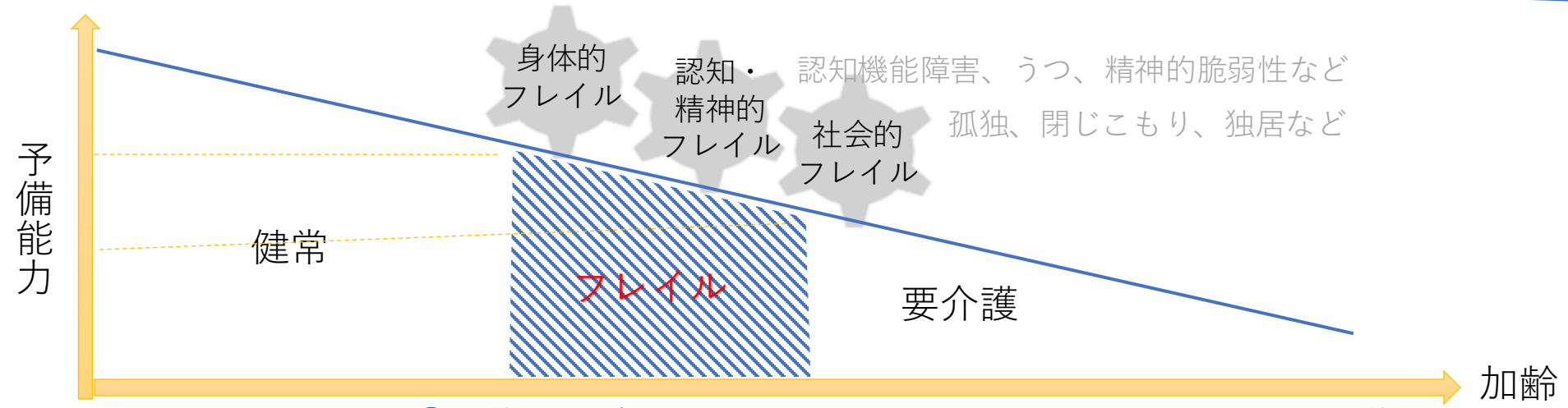
一方、お茶に含まれる重合ポリフェノール類は、分子構造が複雑なため、大部分は明らかになっておらず、その機能性の解明も、更なる研究の推進が求められている。

世界的な日本食ブームの中で輸出量が大幅に増えるなど、海外からも、その機能性に注目を集めている「お茶」をテーマ素材として、オープンイノベーションの下で、人生100年時代の重要な課題であるフレイルの予防・改善への貢献を通じてウェルビーイング実現を目指す研究コミュニティ活動を推進する。

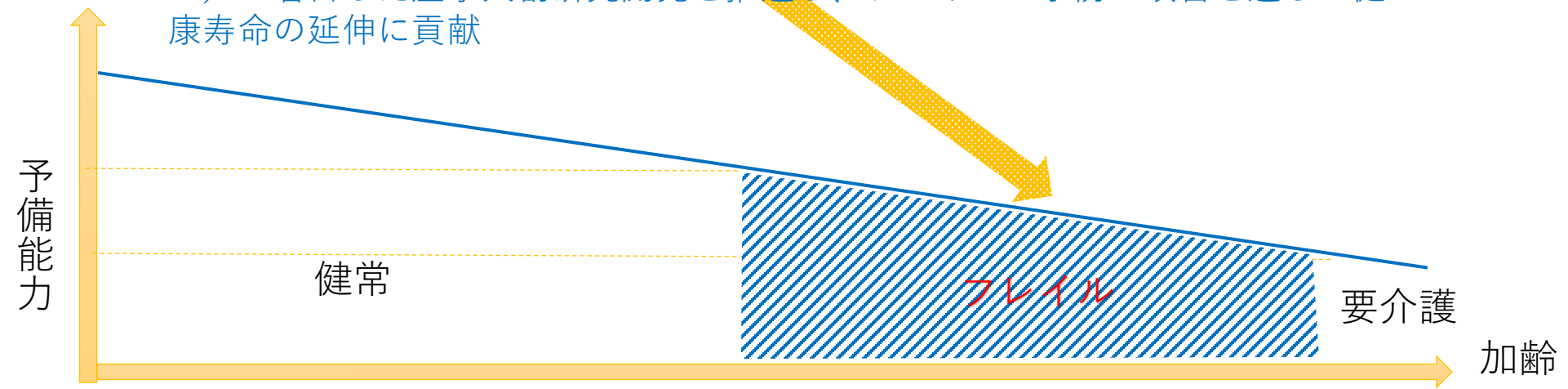
取組方針

オープンイノベーションの下で、ワイガヤ会議を通じて、アグリ及びフードテックの様々な異分野融合研究開発チームを編成し、外部資金等の獲得、産学共同研究、社会実証、事業化を推進する。

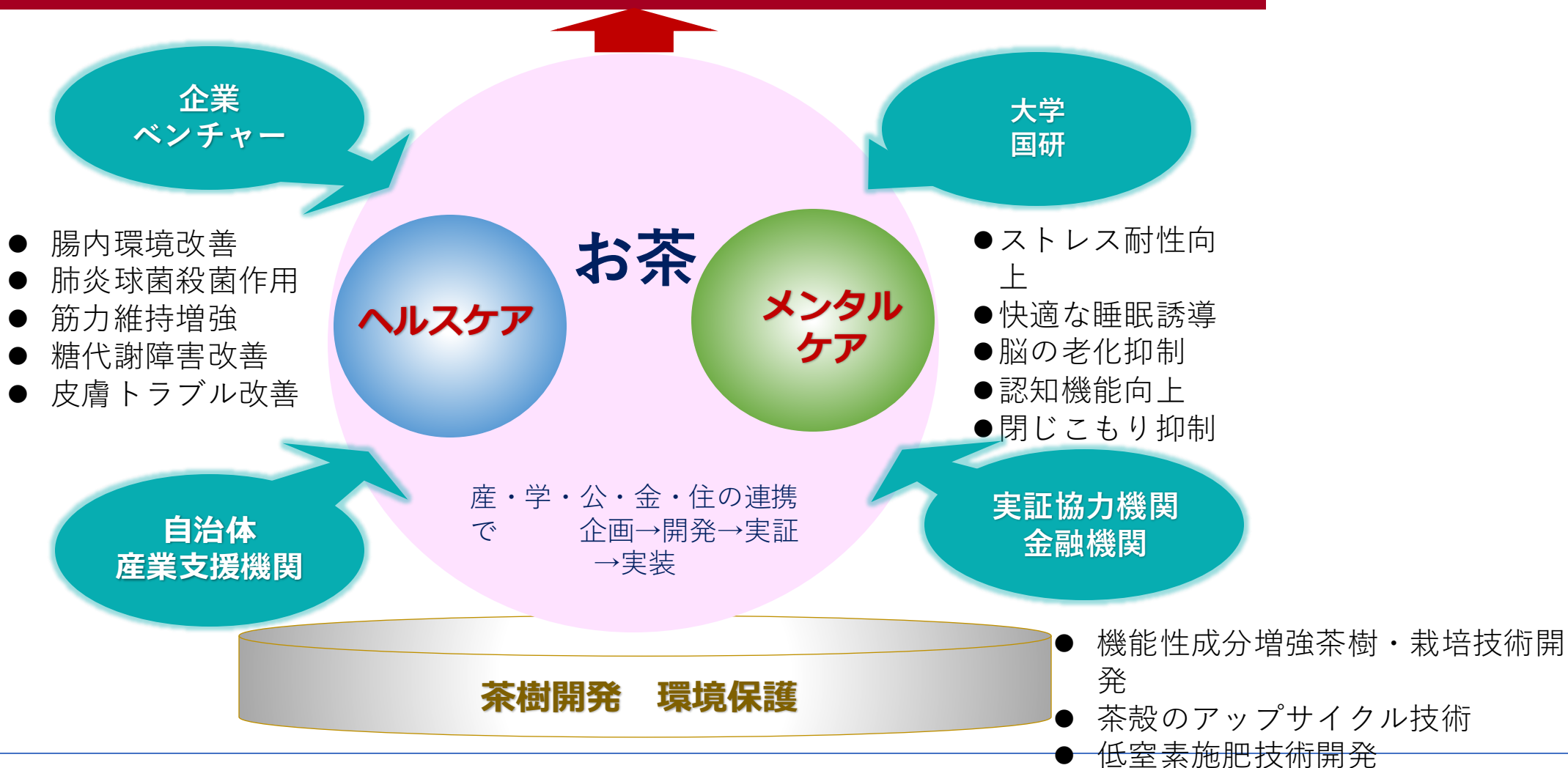
分科会の目指すところ



お茶の有する、①栄養機能（健康維持や成長発育など生きるために必要な栄養となるもの）、②嗜好・社会的機能（味や香り、人間関係など人の欲求を満たすもの）、③生理活性機能（免疫・循環系・神経系など体の機能を調節するもの）に着目した産学共創研究開発を推進し、フレイルの予防・改善を通じて健康寿命の延伸に貢献



フレイルの予防・改善への貢献を通じて一人ひとりのウェルビーイング実現 ～ 人生100年時代を豊か生きる「お茶」のイノベーション ～



分科会の活動 5カ年計画

- 分科会は、共栄製茶株式会社をリーダー機関、京都府立大学を共同機関とし、関西文化学術研究都市の「学研フードテック共創プラットフォーム」とも連携を図りながら、オープンイノベーションの強みを活かし、必要に応じて連携メンバーを拡大し、研究開発プロジェクトを推進していきます。
- 研究開発プロジェクトは、「お茶」の優れた機能性に着目し、研究段階では医療や脳科学分野の機関と、事業化検討段階ではBtoBの相手先となる企業等との連携を進めます。
- また、研究開発の推進に当たり、競争的研究費の獲得などにより公的プロジェクトとしていくことも目指します。

活動事項	2025年	2026年	2027年	2028年	2029年
研究プロジェクト探索	→ (情報交換会、ワイガヤ、アイディエーション)				
ネットワーキング	→ (研究開発テーマ・共同研究者決定、外部資金獲得)				
プロジェクト研究開発		→ (共同研究開発 大) ※必要に応じてアライアンス拡大			
社会実証			→ (PoC、エグジット戦略立案)		